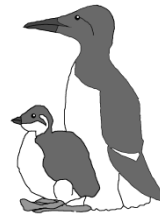


北の海鳥

六号



北海道海鳥保全研究会
会報誌『北の海鳥』
第六号
2018年2月18日
天塩郡豊富町豊富



網走沖でイカナゴをくわえるウトウ 2016年6月29日 川崎康弘 撮影

目次

1. 北海道の海鳥繁殖地

- | | | |
|---------------------|------|---|
| ・神恵内村、窓岩のケイマフリ | 先崎理之 | 2 |
| ・松前小島海鳥調査 2016-2017 | 大門純平 | 4 |

2. 海鳥ニュース

- | | | |
|--------------------------|------|----|
| ・根室半島太平洋側海域の海鳥の状況 | 浦 達也 | 10 |
| ・網走沖の海鳥：ウトウとマダラウミスズメについて | 川崎康弘 | 16 |
| ・日本海北部における繁殖期のウトウの動き | 長谷部真 | 20 |
| ・1950-60年代の大黒島・モユルリ島の海鳥 | 村田英二 | 28 |

3. お知らせ

32

1. 北海道の海鳥繁殖地

神恵内村・窓岩のケイマフリ 先崎理之（当会事務局長）

一積丹半島にもケイマフリがいる—まことしやかにささやかれていたこの噂を初めて聞いたのはいつのことだったでしょうか。全く覚えてないくらい昔ですが、この噂に興味を持ち出したのは国内のケイマフリ生息地を本格的に調べようと画策していた

2011年の暮れでした。そんな中、当会代表の長谷部さんのもとに、この噂に関する情報がもたらされました。内容は、「夏季に積丹半島の窓岩の周りで複数のケイマフリが飛んでいた」というものでした。繁殖地のケイマフリは確かにアクロバティックに飛び回るので、繁殖していそうですが、残念ながらこれだけでは何とも言えません。そこで、百聞は一見に如かずということで実際に調べてみることにしました。



写真1 窓岩の全景

2012年7月16日早朝、札幌で羽幌からはるばるやってきた長谷部さんと合流し、車で積丹半島の東側を北上します。積丹半島先端の神威岬を西側に回り込み、10～20分ほど経ったころでしょうか、長いトンネルを越えてすぐのところに目的の窓岩がありました。海岸からはわずかに200m

ほどしか離れておらず、岩自体も大きくありませんが（写真1）、険しい崖が切り立っており、なるほど確かに海鳥の繁殖には適していそうです。「本当にいるのだろうか?」、そう思いつつも周辺の海上を見渡すと北側の海域に浮かぶ数羽のケイマフリがあっさりと見つかりました。飛び立って窓

岩の周りを旋回する個体もあり、雰囲気的には明らかに繁殖していそうです。時期的には育雛期の後半なので、繁殖していれば時機に餌もち個体が現れるはずです。すると予想通り、すぐにカジカ類と思しき魚を持った成鳥が北側から飛んできました。これでもう繁殖は確認したようなものですが、繁殖つがい数を把握するために岩のどこに飛び込むのかを確認します。しばらくすると、海上に浮かんでいた先ほどの餌を持った成鳥は飛び立ち、ウミネコを警戒しつつも岩の割れ目に飛び込みました（写真 2）。窓岩でのケイマフリの繁殖が初めて確認された瞬間でした。その後も、ケイマフリは続々とやってきて、海上に浮かぶ個体数も増えていきます（写真 3）。結局この日は、28 羽・5 巣を確認することができました。数時間の観察でこの繁殖数ですので、実際にはもう少し繁殖していそうです。ただし、2013 年、2014 年にもケイマフリの生息・繁殖は確認していますが、残念ながらこのとき以降は育雛期の真っただ中に窓岩でのケイマフリを観察する機会を作れておらず、繁殖つがい数がどのくらいいるのかについてはまだ調査の余地が残されています。



写真 2 カジカの仲間を運ぶケイマフリ
（真ん中の小さい黒点がケイマフリ、右上は拡大）



写真 3 窓岩周辺に浮かぶケイマフリの成鳥（右上は拡大）

さて、窓岩では一体いつからケイマフリが繁殖しているのでしょうか？この繁殖確認の後に私たちの調べた限りでは、やはり以前から繁殖していたという確たる証拠を持っている人はいませんでした。しかし、ずっと以前にも窓岩周辺でケイマフリを観察したことがある、という情報はいくつかもたらされました。ウミスズメ科を含む海鳥の多くはコロニーで繁殖します。コアシサシなどの一部の種類を除けば、コロニーの場所は頻繁に変わるわけではなく、一度繁殖個体がいなくなったコロニーで再び繁殖が始まった例は恐らくありません。そう考えると、窓岩のケイマフリもずっと以前から繁殖していたと考えるのが自然でしょう。なお、窓岩では数百羽のウミネコ、数つがいのオオセグロカモメも繁殖しており、ウミスズメも繁殖の可能性があります。今後も窓岩がケイマフリを含む海鳥たちの繁殖地であり続けられるよう、我々はそっ

・松前小島海鳥調査 2016-2017
 大門純平
 北海道大学水産科学院修士2年

■はじめに

松前小島は、北海道南西端の松前町から25km沖に位置する面積約1.54 km²の無人島です(図1)。本島は、全島が国の天然記念物および道指定鳥獣保護区特別保護区に指定されており、環境省モニタリングサイト1000海鳥調査の対象となっている海鳥繁殖地です。

2016年6月上旬に行われた調査では、ウトウ *Cerorhinca*

monocerata, ウミネコ *Larus crassirostris*, ウミウ *Phalacrocorax capillatus*の繁殖が確認されるとともに、ケイマフリ *Cephus carbo*, オオセグロカモメ *Larus schistisagus*の繁殖の可能性が確認されています(環境省自然環境局生物多様性センター2017)。しかし、本島で繁殖する海鳥の詳しい生態が調べられたことはありません。私たちのグループは、本島において2016-2017年5-6月にウトウの繁殖状況と餌を中心に海鳥の調査を行いましたので、その結果をご報告いたします。



図1. 松前小島。最大標高は293mの火山島。

■ウトウの繁殖状況と餌

ウトウは北太平洋で広く繁殖するウミスズメ科の海鳥で、日本では北海道周辺を中心とした北日本で50万巣(利用していない巣も含む)以上が確認されています(環境省自然環境局生物多様性センター2015)。松前小島では約4万のウトウの巣穴が確認され

ており(環境省自然環境局生物多様性センター2017)、これは北海道日本海側中北部の天売島(約38万巣、環境省自然環境局生物多様性センター2017)、北海道東部太平洋側の大黒島(約7万4000巣;大門2016)、北海道日本海側北部の海驢島(約4万7000巣;長谷部・先崎2016)につぐ国内4番目の大きさの繁殖地と考

えられます(図2)。

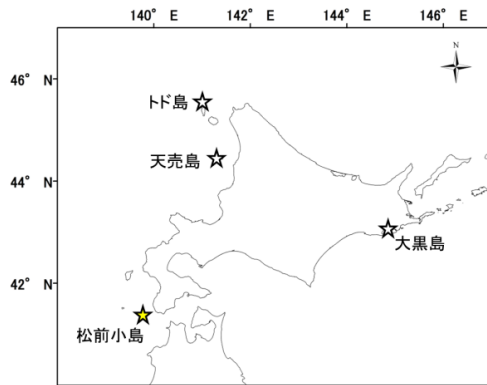


図2. 松前小島および他の繁殖地の位置。

1990年代以降、北海道周辺で繁殖するウトウは、6-7月にかけて本州周辺から北海道周辺まで分布を拡大してくるカタクチイワシ *Engraulis japonicus* を主に雛に与え、毎年多くの雛を巣立たせていました。一方、2014年以降の天売島では、親鳥が雛にカタクチイワシをほとんど与えな

くなり、その結果雛はほとんど巣立たなくなっています(天売海鳥研究室未発表)。このことから、カタクチイワシがなんらかの要因で天売島周辺まで分布を拡大しなくなったことが示唆されますが、このようなカタクチイワシの分布変化による影響が北海道周辺の他の繁殖地でも同様に起っているかはわかりません。たとえば、松前小島は天売島よりも約300 km南に位置しているため、まだカタクチイワシが周辺海域に分布しており、多くの雛が巣立っているかもしれません。そこで、2016年の育雛前期、2017年の育雛前期および後期に松前小島に数日間ずつ入島し、それぞれの時期において雛に与えられている餌と雛の栄養状態の調査を行いました。

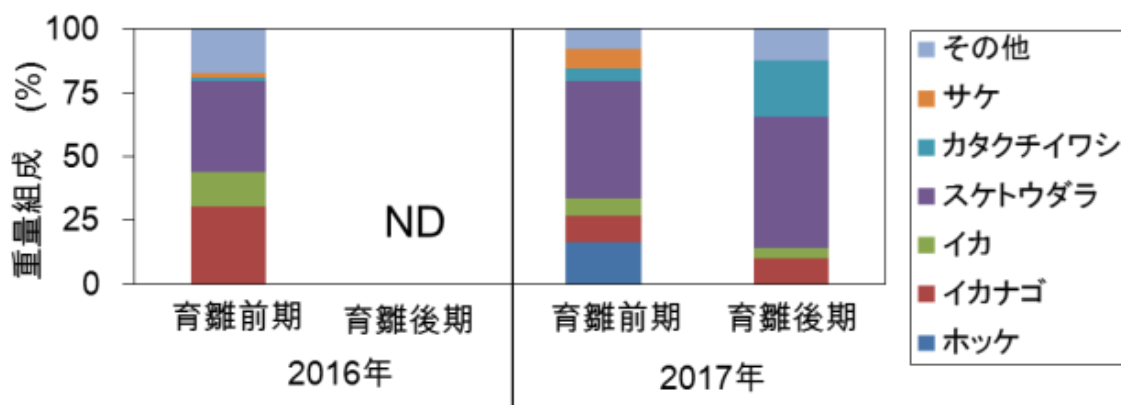


図3. 2016-2017年の育雛前期・後期のウトウが雛に与えた餌の重量組成。NDはデータがないことを示す。

2016年、2017年ともに松前小島の親鳥は主にスケトウダラ *Gadus chalcogrammus* 稚魚などを雛に与えており(図3)、1回あたりの給餌量(16-19 g)はカタクチイワシを多く与えていた時期の天売島(23-35 g, Takahashi et al. 2001)よりも少ないということがわかりました。また、

雛の栄養状態は、2016-2017年の天売島(雛がほとんど巣立っていない; 天売海鳥研究室 未発表)と違いはありませんでした。

先行研究によると、スケトウダラの産卵は12-3月に北海道南部日本海で行われ、その後孵化した仔魚は海流によって北に流され(三宅ほか

北の海鳥 6号

2008), 4 月時点で稚魚の大半は北海道北部日本海に分布しています(板谷ほか 2008)。したがって, 6 月の北海道南部日本海にはスケトウダラ稚魚はほぼ分布していないと考えられますが, 松前小島のウトウの餌にはスケトウダラ稚魚が多く含まれるという矛盾が生じていました。このような矛盾が生じた理由ははっきりとはわかりません。ただ, カタクチイワシの代替となるホッケ稚魚といった餌種の資源量が北海道北部日本海に比べてはるかに小さく, わずかにしか分布していないスケトウダラ稚魚に頼らざるをえなかったのかもしれません。結論として, 近年の松前小島周辺では, カタクチイワシが少なく代替としてスケトウダラ稚魚を主に雛に与えているものの, 給餌量は小さいため, 繁

殖状況は芳しくないことがわかりました。

■海上センサス

2017 年 5 月の調査時に繁殖地周辺の海上を船でゆっくりと 1 周し, ウミネコの着地個体数とケイマフリの着水・着地個体数を記録しました。その結果, ウミネコを計 2031±個体, ケイマフリを計 7 個体(1 個体は着地)確認しました(図 4)。

2016 年 6 月に行われた同様の調査ではウミネコの着地個体数が 2310±個体, ケイマフリの着水個体数は 15 羽であり(環境省自然環境局生物多様性センター 2017), どちらも今回の結果よりもわずかに多かったです。しかし, このような違いが生まれた理由は, わかりませんでした。



図 4. 島 1 周センサスで観察されたウミネコ・ケイマフリの観察個体数および位置。

北の海鳥 6号

また、松前町から松前小島までの往復の際に天候条件が良かった時は、海上センサス(船の右舷で、船首方向から正横方向までの範囲で、船から300m以内に入った海鳥の種類と数を記録)を行いました(表1)。その結果、2016年、2017年の5月はともにハシボソミズナギドリが多くみられましたが、6月には全く見られませんでした。また、ケイマフリは今回行ったすべてのセンサスで観察されました。特に2017年6月27日および28日に観察された13個体中3個体は海上で餌をくわえており、そのうち

1個体の餌種はイカナゴでした。

ハシボソミズナギドリは南半球で繁殖を行い、一部の個体は北太平洋の越冬海域にわたっていく際に津軽海峡周辺を4-5月に通過することが知られており(伊藤・小城 1999)、今回のセンサスで観察された時期と一致しています。また、今回餌をくわえたケイマフリが海上で観察されたことは、本種が松前小島で繁殖している可能性を示しており、先行研究(Senzaki et al. 2015, 環境省自然環境局生物多様性センター 2017)と一致しています。

表1. 松前町ー松前小島往復の際に観察された海鳥の種類と個体数。

	2016/5/6 11:11-12:42 松前町→小島	2016/5/9 12:48-14:04 小島→松前町	2017/5/10 9:28-10:53 松前町→小島	2017/5/10 13:40-15:02 小島→松前町	2017/6/6 10:16-11:38 松前町→小島	2017/6/27 10:38-11:55 松前町→小島	2017/6/28 14:53-16:24 小島→松前町
ウトウ <i>Cerorhinca monocerata</i>	25	25	22	15	1	4	
ケイマフリ <i>Cephus carbo</i>	1	1	2	2	6	10	3
エトビリカ <i>Fratercula cirrhata</i>						1	
ウミスズメ <i>Synthliboramphus antiquus</i>					1		
ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>	25	41	78	16	22	39	55
オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>	5	5	2				
ウミウ <i>Phalacrocorax capillatus</i>	1	2	7		4		
カンムリカイツブリ <i>Podiceps cristatus</i>					1		
アビ <i>Gavia stellata</i>	1						
ハシボソミズナギドリ <i>Puffinus tenuirostris</i>	37	32	625	283			
アカエリヒレアシシギ <i>Phalaropus lobatus</i>		9		50			
ヒレアシシギ属 <i>Phalaropus</i> sp.	16						
ハクセキレイ <i>Motacilla alba lugens</i>		1					
ツバメ <i>Hirundo rustica</i>			4				

■調査を終えて

今回は調査結果を示しませんでした。1 晩に雛に与えられる給餌量を調べるため、夕方と翌日早朝の雛の体重を測定するという作業も行いました。早朝の測定は、2 時ごろの真っ暗な時間帯から行うのですが、2017 年 6 月に行った調査の時は測定途中にふと海をみたところ目を見張るほどの朝焼けができており(図 5)、そのなかを出巢してきたウトウが次々と飛び立っていくという状況でした。あまりに鮮やかな朝焼けの中、数多のウトウが強烈な羽音とともに猛スピードで頭上を通過する光景の素晴らしさは、なかなか言葉ではいい尽くせませんが、松前小島で調査を行える幸せを改めて実感できました。

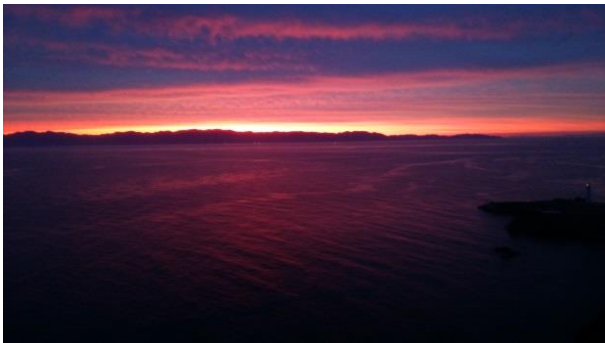


図 5. 松前小島から見た朝焼け。

以上のように印象深いできごとがあった一方で、残念な事実も観察されました。松前小島のウトウのコロニーでは、くちばしについた釣り糸が植物にからまったまま動けなくなり死んでいるウトウが多く、5 回行った調査のすべてで少なくとも 10 個体以上が確認されました(図 6)。おそらく、はえ縄漁業で混獲されてしまい、くちばしに釣り針がついたままの状態です糸を切られて、繁殖地まで帰ってきたのでしょう。天売島やトド島、大黒島ではこのような個体は見かけないので、松前小島周辺で行われている特有の漁業による影響なのかもしれません。



図 6. くちばしにはえ縄糸がからまり死亡したウトウ。

最後に、今回松前小島で調査をしていて印象に残ったことを記載しておきます。天売島や大黒島では、親鳥が雛に餌を持ち帰ってくる時間帯はおおむね日暮れから 1-2 時間以内がピークであり、餌採集調査はその時間帯に集中して行います。一方、松前小島では親鳥は比較的ばらばらに帰ってきており、日暮れから 3 時間以上が経過しても餌を持った親鳥がちらほらと帰ってきていました。また、出巢のタイミングは天売島や大黒島、トド島では日の出前のかかなり薄暗い中を一斉に飛び立っていくのですが、松前小島ではかなり明るくなった時間まで出巢が続いており、タイミングは比較的バラバラのようでした。過去に天売島と大黒島で繁殖するウトウの帰巢のタイミングを比較した研究では、餌略奪を行うウミネコがコロニーにいる天売島の親鳥は、略奪者がいない大黒島の親鳥に比べて、帰巢のタイミングが比較的遅くまで続き、それは略奪者を避けるためではないかと考察されています(Watanuki 1990)。確かに松前小島には略奪者になりうるウミネコが繁殖していますが、今回の調査ではウトウのコロニー内においてウミネコは確認されていません。近年は餌が少なく、雛に与える餌をとるのに苦労して帰巢の時間が遅くな

っているのでしょうか。このように考えればきりがありませんが、今回は帰巢や出巢のタイミングに関する定量的なデータもとれておらず、いずれも想像の議論になってしまいますので、そろそろやめておきます。一つ間違いないのは、松前小島がたくさんの面白いなぞを持つ魅力的なフィールドであることでしょう。

■謝辞

今回の松前小島調査を行うにあたり、北海道大学大学院水産科学研究院の綿貫豊さん、松前町在住の吉田修策さんと吉田修さん、東洋大学生命科学部の伊藤元裕さん、東京大学大気海洋研究所の佐藤信彦さん、北海道大学大学院水産科学院の山本真理子さん、塚本祥太さん、林はるかさんに大変お世話になりました。本調査の一部は、京都大学共同利用・共同研究の計画研究(2017-A-8)、科学研究費補助金(17K15308)の予算によって実施されました。以上、謹んで感謝申し上げます。

■引用文献

長谷部真・先崎理之 (2016). 礼文島における海鳥の繁殖記録. 利尻研究, 35, 25-29.
板谷和彦, 三宅博哉, 和田昭彦, 宮下和士 (2008). 北海道日本海・オホーツク海沿岸域におけるスケトウダラ仔稚魚の分布. 水産海洋研究, 73(2), 80-89.
伊藤真・小城春雄 (1999). 船舶搭載レーダーによるハシボソミズナギドリ (*Puffinus tenuirostris*) の飛翔速度の計測. 山階鳥類研究所研究報告, 31(2),

88-93.

環境省自然環境局 生物多様性センター (2015). 重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 海鳥調査 第2期とりまとめ 報告書. 東京.

環境省自然環境局 生物多様性センター (2017). 平成 28 年度 モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書. 東京.

三宅博哉, 板谷和彦, 浅見大樹, 嶋田宏, 渡野邊雅道, 武藤卓志, 中谷敏邦 (2008). 卵分布からみた北海道西部日本海におけるスケトウダラ産卵場形成の現状. 水産海洋研究, 72(4), 265-272.

大門純平 (2016). 大黒島で繁殖する海鳥の繁殖数推定. 北の海鳥, 3, 8-16.

Senzaki, M., Hasebe, M., Kataoka, Y., Fukuda, Y., Nishizawa, B. & Watanuki, Y. (2015). Status of the Spectacled Guillemot (*Cepphus carbo*) in Japan. Waterbirds, 38(2), 184-190.

Takahashi, A., Kuroki, M., Niizuma, Y., Kato, A., Saitoh, S. & Watanuki, Y. (2001). Importance of the Japanese anchovy (*Engraulis japonicus*) to breeding rhinoceros auklets (*Cerorhinca monocerata*) on Teuri Island, Sea of Japan. Marine Biology, 139(2), 361-371.

Watanuki, Y. (1990). Daily activity pattern of Rhinoceros Auklets and kleptoparasitism by Black-tailed Gulls. Ornis Scandinavica, 28-36.

2. 海鳥ニュース

- ・根室半島太平洋側海域の海鳥の状況
浦達也
(公財) 日本野鳥の会 自然保護室

■はじめに

海上は風況がよく、恒常的に陸上の2倍近い発電量を確保しやすいことから、洋上風力発電の導入が気候変動対策の一つとして世界的に進んでおり、日本でも建設適地が減少してきた陸上風力発電設備に代わるものとして導入拡大が期待されている(石原 2011[1])。

しかし、洋上風力発電の導入が進む海外では、その導入拡大に伴い海鳥を中心とした鳥類について、陸上風力発電設備でみられるものと同様の影響が発生することが報告されるようになってきた(浦 2015[2])。

環境省(2011)[3]では、根室海峡および根室半島の太平洋側が洋上風力発電の導入に関して事業採算性が高い海域として示されていることから、今後は着底式を含めて洋上風力発電の建設適地として選ばれる可能性が高い海域である。根室の海鳥に関する情報は藤巻(1961)[4]、阿部・松木(1968)[5]、藤巻(1976)[6]、綿貫ら(1988)[7]、福田・小林(2009)[8]、環境省(2011)[9]、環境省(2014)[10]にあるが、ユルリ・モユルリ島で繁殖する鳥類および知床半島南側海域の鳥類相に関する情報であり、根室半島周辺の海域全体における海鳥の情報は無い。そのため、実際に根室半島周辺で洋上風力発電設備が建設される場合に、どのような海鳥および海域が影響を受けるか事前に予測し、事業者および行政機関に提言するために当会は、根室半島太平洋側に生息する海鳥の種類等の基礎情報を収集したので、その結果をこ

こに報告する。

■方法

調査対象海域は、根室半島の先端にある納沙布岬から根室市初田牛と浜中町恵茶人の境界線付近にあるガッカラ浜までの約40kmの海岸線から沖合0.5~10km程度までとした。なお、調査対象海域をフレシマ地区(ガッカラ浜~三里浜)、ユルリ島地区(落石漁港~長節小沼北部)、歯舞地区(丹根沼~納沙布岬)の三つに分け(図1)、海鳥の状況を把握した。

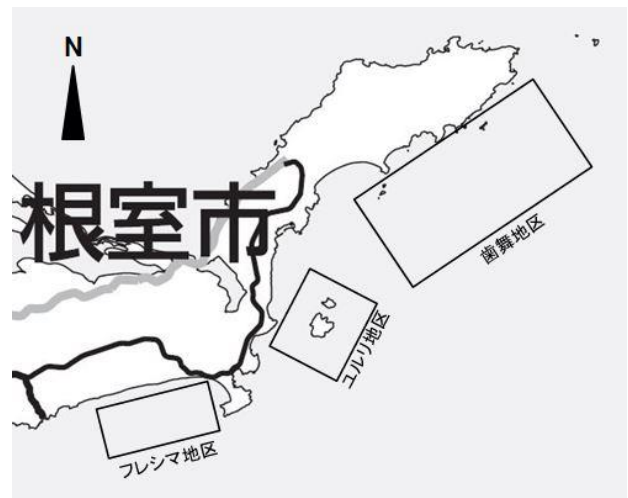


図1. 調査対象海域. 西からフレシマ地区、ユルリ島地区、歯舞地区の3つに分けて、海鳥調査を行った。

調査を行ったのは、2011年は10月12・13・14日、11月3・4・5日、12月6・7・10・11日、2012年は2月1・3・4日、3月21・22日、5月8・9日、6月30日および7月1日であり、1回の調査につき4時間程度、海上にて海鳥およびカモ科の鳥類をカウントした。

調査は、落石漁協および歯舞漁協から傭船した排水量5tまたは10tの船を使い、舳先から半径300m以内に浮いている、および飛行している海鳥の種名と個体数をすべて、目視および8倍の双眼鏡を用いてカ

ウントした。

調査対象海域の海鳥の状況（おもに種名と個体数）を把握するという目的の調査のため、調査コースは一定間隔のセンサスルートを設けるのではなく、調査時に海鳥が多くいると考えられる場所に向かいながら、海鳥をカウントした。

■結果および考察

全体の調査結果を根室半島太平洋側海域の鳥類相として表 1 に示す。表 1 から、根室半島太平洋側海域ではクロガモ・ヒメウ・オオセグロカモメ・ウミガラス・ケイマフリが留鳥として周年生息しており、ミツユビカモメが夏期を除く周年、ウトウの繁殖海域、コウミスズメの越冬海域、オオミスナギドリ・ハシボソミスナギドリ・ハイロヒレアシシギの渡り経路になっていることが分かった。

根室から近い知床半島南側海域で本研究と同様の調査を行った福田・小林(2009)と今回の結果を比較すると、まず、確認種数が福田・小林(2009)は 35 種だったが、当研究では 49 種だったことから、根室半島太平洋側海域の方が海鳥の種数が多いことが分かった。特に、秋の渡りの時期に本研究の結果の方が海鳥の種数、個体数が多いことから、根室半島には海鳥にとって重要な渡り経路があるものと考えられる。なお、福田・小林(2009)ではハシボソミスナギドリの非繁殖期に万単位の個体数のハシボソミスナギドリを確認しているため、1,300 個体しか確認していない根室半

島と比べて、知床半島はこの種にとって重要な越冬および採餌海域となっており、本研究結果との大きな違いとなった。

次に、今回調査を行った 3 つの地区の海域で海鳥の出現状況に違いがあるかを知るため、2012 年 3 月の調査結果をフレシマ地区・ユルリ島地区・歯舞地区の間で比較した。その結果、3 地区ともクロガモが一番多くみられる種であったが、中でもフレシマ地区は個体数が非常に多かった。そして、フレシマ地区ではビロードキンクロが、ユルリ島地区ではウトウの数が非常に多いほか、コオリガモ、コクガンが、歯舞地区ではシノリガモ、コウミスズメやウミスズメがほかの地区と比べ多くみられた(表 2)。また、ヒメウ、ケイマフリ、ウミガラスはユルリ島地区と歯舞地区の両方で、フレシマ地区と比べ多く観察された(表 2)。

落石海域の漁場基本図(1/25,000)によると、フレシマ地区の海底は砂質が多い一方、ユルリ島地区および歯舞地区は岩石が多い海底となっている。このことから考えると、フレシマ地区はコンブなどから成る藻場があり、貝類や甲殻類が多数生息することでクロガモやビロードキンクロなど貝を食べる潜水カモ類が集まり、一方、ユルリ島地区および歯舞地区は魚種が多く、捕食に適したサイズの魚類も豊富なため、カモメ類、ケイマフリやウトウを含むウミスズメ類、ウミガラスなど主に魚を食べる海鳥が集まるものとする。

表1. 根室半島太平洋側の海域で観察された海鳥の種名と個体数.

表1. 松山・大浜・上野の鳥類調査結果の年次別調査結果

種 名 species name	2011 year			2012 year			
	10月 Oct.	11月 Nov.	12月 Dec.	2月 Feb.	3月 Mar.	5月 May	7月 July
	個体数(n) / %	個体数(n) / %	個体数(n) / %	個体数(n) / %	個体数(n) / %	個体数(n) / %	個体数(n) / %
1 ヨクガン <i>Branta bernicla</i>	-	-	-	-	26 / 0.58	-	-
2 ヒドリガモ <i>Anas penelope</i>	-	-	2 / 0.07	-	-	-	-
3 オナガガモ <i>Anas acuta</i>	-	8 / 0.12	-	-	-	-	-
4 キンクロハジロ <i>Aythya fuligula</i>	-	-	-	-	40 / 0.89	-	-
5 スズガモ <i>Aythya marila</i>	-	-	-	-	-	1 / 0.04	-
6 シノリガモ <i>Histrionicus histrionicus</i>	22 / 0.39	52 / 0.81	144 / 5.12	72 / 2.51	53 / 1.18	14 / 0.58	-
7 ピロードキンク <i>Melanitta fusca</i>	151 / 2.70	54 / 0.84	25 / 0.89	29 / 1.01	18 / 0.40	4 / 0.17	-
8 クロガモ <i>Melanitta americana</i>	687 / 12.29	1277 / 19.81	574 / 20.39	1610 / 56.12	2700 / 60.00	546 / 22.53	300 / 4.80
9 コオオリガモ <i>Glaugula hyemalis</i>	-	7 / 0.11	74 / 2.63	58 / 2.02	97 / 2.16	3 / 0.12	-
10 ホオジロガモ <i>Bucephala albeola</i>	-	-	-	-	-	-	-
11 ウミアイサ <i>Mergus serrator</i>	-	2 / 0.03	1 / 0.04	8 / 0.28	-	-	-
12 カモ類 ANATIDAE sp.	-	16 / 0.25	-	-	33 / 0.73	51 / 2.10	-
13 アカエリカイツブリ <i>Podiceps grisegena</i>	-	2 / 0.03	12 / 0.43	11 / 0.38	1 / 0.02	2 / 0.08	-
14 ハジロカイツブリ <i>Podiceps nigricollis</i>	-	-	-	24 / 0.84	-	-	-
15 カンムリカイツブリ類 <i>PODICEPS</i> sp.	1 / 0.02	12 / 0.19	4 / 0.14	3 / 0.10	33 / 0.73	6 / 0.25	-
16 オオハム <i>Gavia arctica</i>	122 / 2.18	19 / 0.29	2 / 0.07	-	1 / 0.02	2 / 0.08	2 / 0.03
17 シロエリオオハム <i>Gavia pacifica</i>	-	2 / 0.03	-	-	-	-	-
18 アビ類 <i>GAVIA</i> sp.	60 / 1.07	55 / 0.85	41 / 1.46	1 / 0.03	1 / 0.02	173 / 7.14	22 / 0.35
19 フルマカモメ <i>Fulmarus glacialis</i>	3 / 0.05	72 / 1.12	-	-	-	-	-
20 オオミズナギドリ <i>Calonectris leucomelas</i>	573 / 10.25	-	-	-	-	-	-
21 ハイエリミズナギドリ <i>Puffinus griseus</i>	241 / 4.31	-	-	-	-	-	-
22 ハシボソミズナギドリ <i>Puffinus tenuirostris</i>	5 / 0.09	-	-	-	-	-	-
23 アカアシミズナギドリ <i>Puffinus carneipes</i>	-	1 / 0.02	-	-	-	240 / 9.91	1382 / 22.12
24 ミズナギドリ類 <i>PROCELLARIIDAE</i> sp.	218 / 3.90	-	-	-	-	-	-
25 ヒメウ <i>Phalacrocorax pelagicus</i>	684 / 12.24	1316 / 20.41	634 / 22.52	341 / 11.89	327 / 7.27	26 / 1.07	1 / 0.02
26 チンワウガラス <i>Phalacrocorax urile</i>	3 / 0.05	3 / 0.05	-	2 / 0.07	1 / 0.02	228 / 9.41	49 / 0.78
27 ウミウ <i>Phalacrocorax capillatus</i>	50 / 0.89	121 / 1.88	10 / 0.36	-	11 / 0.24	3 / 0.12	2 / 0.03
29 アカエリヒレアシシギ <i>Phalaropus lobatus</i>	15 / 0.27	-	-	-	-	46 / 1.90	25 / 0.40
30 ハイエリヒレアシシギ <i>Phalaropus fulicarius</i>	1 / 0.02	370 / 5.74	-	-	-	-	-
31 ヒレアシシギ類 <i>PHALAROPUS</i> sp.	64 / 1.15	-	-	-	-	-	-
32 ミツユビカモメ <i>Rissa tridactyla</i>	609 / 10.90	1703 / 26.42	68 / 2.42	5 / 0.17	5 / 0.11	1 / 0.04	-
33 ユリカモメ <i>Larus ridibundus</i>	-	2 / 0.03	-	-	-	-	-
34 ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>	74 / 1.32	33 / 0.51	11 / 0.39	-	9 / 0.20	262 / 10.81	255 / 4.08
35 カモメ <i>Larus canus</i>	-	23 / 0.36	51 / 1.81	9 / 0.31	-	-	-
36 ワシカモメ <i>Larus glaucescens</i>	-	1 / 0.02	2 / 0.07	1 / 0.03	1 / 0.02	-	-
37 シロカモメ <i>Larus hyperboreus</i>	-	3 / 0.05	16 / 0.57	22 / 0.77	1 / 0.02	1 / 0.04	-
38 セグロカモメ <i>Larus argentatus</i>	2 / 0.04	38 / 0.59	-	1 / 0.03	-	-	-
39 オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>	569 / 10.18	530 / 8.22	275 / 9.77	68 / 2.37	196 / 4.36	171 / 7.06	200 / 3.20
40 カモメ類 <i>LARUS</i> sp.	209 / 3.74	38 / 0.59	158 / 5.61	62 / 2.16	5 / 0.11	-	-
41 オオトウゾクカモメ <i>Stercorarius maccoimicki</i>	1 / 0.02	2 / 0.03	-	-	-	-	-
42 トウゾクカモメ <i>Stercorarius pomarinus</i>	12 / 0.21	2 / 0.03	-	-	-	-	-
43 クロトウゾクカモメ <i>Stercorarius parasiticus</i>	1 / 0.02	-	-	-	-	-	-
44 トウゾクカモメ類 <i>STERCORARIUS</i> sp.	32 / 0.57	6 / 0.09	-	-	-	-	-
45 ハシブトウミガラス <i>Uria lomvia</i>	- / -	-	25 / 0.89	-	7 / 0.16	-	-
47 ウミガラス <i>Uria aalge</i>	4 / 0.07	1 / 0.02	19 / 0.67	95 / 3.31	105 / 2.33	2 / 0.08	5 / 0.08
48 ウミバト <i>Cephus columba</i>	-	12 / 0.19	1 / 0.04	8 / 0.28	3 / 0.07	4 / 0.17	-
49 ケイマフリ <i>Cephus carbo</i>	2 / 0.04	20 / 0.31	210 / 7.46	273 / 9.52	304 / 6.76	107 / 4.42	27 / 0.43
50 マダラウミスズメ <i>Brachyramphus perdix</i>	-	-	-	-	1 / 0.02	2 / 0.08	-
51 ウミスズメ <i>Synthliboramphus antiquus</i>	26 / 0.47	293 / 4.54	231 / 8.21	65 / 2.27	17 / 0.38	39 / 1.61	2 / 0.03
52 ウミオウム <i>Aethia psittacula</i>	-	-	1 / 0.04	-	-	-	-
53 コウミスズメ <i>Aethia pusilla</i>	-	-	221 / 7.85	99 / 3.45	103 / 2.29	-	-
54 エトロフウミスズメ <i>Aethia cristatella</i>	-	-	2 / 0.07	2 / 0.07	11 / 0.24	-	-
55 ウトウ <i>Gerorhinca monocerata</i>	1147 / 20.53	351 / 5.44	-	-	390 / 8.67	489 / 20.18	3968 / 63.52
56 エトビロカ <i>Fratercula cirrhata</i>	-	-	1 / 0.04	-	-	-	5 / 0.08
	5588	6447	2815	2869	4500	2423	6247

北の海鳥 6号

最後に、根室半島太平洋側海域における洋上風力発電設備の導入について、今回の調査で明らかとなった海鳥の状況からみて適正な立地があるかを考える。根室半島周辺は、1回4時間程度の調査で約30種2000羽を数えるなど種数および個体数が非常に多く、そのことは3地区とも同じ状況であった。根室半島太平洋側海域全体が国内でも有数の海鳥の生息地となっているため、洋上風力発電が導入されると、根室半島太平洋側海域全体で影響を受ける海鳥が多いと考える。一方、歯舞地区で予備的調査として16km沖まで海鳥の状況を調

べたが、離岸距離が10km以上あれば生息する海鳥の種数や個体数が大きく減ったため、浮体式洋上風力発電などで遠く沖合に設備を建設するのであれば、沿岸域と比べると影響を受ける海鳥は減少する可能性がある。実際に、洋上風力発電設備の導入が盛んな英国では、海鳥をはじめとした自然環境への影響を減らす目的もあり、遠浅な北海では20～30km沖合に洋上風力発電設備を導入するようになっていることから、根室でも沿岸域での洋上風力発電設備の導入は避け、英国のようにかなり沖合での導入を検討すべきであると考え。

表2. 2012年3月におけるフレシマ、ユルリ島、歯舞の3地区における鳥類相の違いを個体数が多い順番に示した。

フレシマ			ユルリ島			歯舞		
種名	個体数	/ %	種名	個体数	/ %	種名	個体数	/ %
1 クロガモ	1617	/ 85.87	クロガモ	470	/ 35.82	クロガモ	613	/ 46.62
2 ヒメウ	61	/ 3.24	ウトウ	321	/ 24.47	ケイマフリ	165	/ 12.55
3 コウミスズメ	46	/ 2.44	ケイマフリ	117	/ 8.92	ヒメウ	152	/ 11.56
4 ビロードキンクロ	40	/ 2.12	ヒメウ	114	/ 8.69	オオセグロカモメ	79	/ 6.01
5 オオセグロカモメ	32	/ 1.70	オオセグロカモメ	85	/ 6.48	ウミガラス	75	/ 5.70
6 カモ類	25	/ 1.33	コオリガモ	82	/ 6.25	ウトウ	69	/ 5.25
7 ケイマフリ	22	/ 1.17	ウミガラス	30	/ 2.29	シノリガモ	52	/ 3.95
8 カイツブリ類	18	/ 0.96	コクガン	24	/ 1.83	コウミスズメ	47	/ 3.57
9 ワタリガラス	6	/ 0.32	ウミウ	11	/ 0.84	ウミスズメ	17	/ 1.29
10 カモメ類	4	/ 0.21	コウミスズメ	10	/ 0.76	ビロードキンクロ	13	/ 0.99
11 コオリガモ	3	/ 0.16	カイツブリ類	9	/ 0.69	コオリガモ	12	/ 0.91
12 エトロフウミスズメ	3	/ 0.16	ウミネコ	9	/ 0.69	ミツユビカモメ	5	/ 0.38
13 オオワシ	3	/ 0.16	ハシブトウミガラス	9	/ 0.69	カイツブリ類	4	/ 0.30
14 オオハム	1	/ 0.05	カモ類	8	/ 0.61	エトロフウミスズメ	4	/ 0.30
15 シノリガモ	1	/ 0.05	ビロードキンクロ	5	/ 0.38	コクガン	2	/ 0.15
16 ウミバト	1	/ 0.05	エトロフウミスズメ	4	/ 0.30	ウミバト	2	/ 0.15
17			アカエリカイツブリ	1	/ 0.08	アビ類	1	/ 0.08
18			カモメ	1	/ 0.08	チシマウガラス	1	/ 0.08
19			シロカモメ	1	/ 0.08	ワシカモメ	1	/ 0.08
20			カモメ類	1	/ 0.08	マダラウミスズメ	1	/ 0.08
1883			1312			1315		

■謝辞

今回の研究を実施するにあたり、すべての調査で調査員を務めてくださった知床海鳥研究会の福田佳弘氏の存在なしには、この調査を実施することができなかった。また、甲村真理氏、高田令子氏、青木則幸氏、北村亘氏、(公財)日本野鳥の会の職員(故・

小林豊氏、葉山政治氏、山本裕氏、手嶋洋子氏、善波めぐみ氏、山岸洋樹氏)、そして、傭船にあたり落石漁協および歯舞漁協の組合員および落石ネイチャークルーズ協議会の皆様に大変お世話になった。ここに記して、深く感謝を申し上げる。

■引用文献

- [1]石原 孟. 2011. 急拡大する洋上風力発電の現状と将来展望. 日本風力エネルギー学会誌 35 (2) :4 - 8.
- [2]浦達也. 2015. 風力発電が鳥類に与える影響の国内事例. Strix31:3-30.
- [3]環境省. 2011. 平成 22 年度 再生可能エネルギー導入ポテンシャル調査 調査報告書. 環境省, 東京.
- [4]藤巻裕蔵. 1961.モユルリ島の海鳥類. 鳥 16 (78) :387 - 398.
- [5]藤巻裕蔵. 1976.ユルリ,モユルリ両島の鳥類. 山階鳥類研究所報告 8 (1) :68-88.
- [6]阿部学・松木勝彦. 1968. 根室市花咲港付近の鳥類. 鳥 18(84):227 - 246.
- [7]綿貫豊・近藤憲久・中川元. 1988. 北海道周辺における海鳥繁殖地の現状. 日本鳥学会誌 37 (1) :17 - 32.
- [8]福田佳弘・小林万理. 2009. 根室海峡における海鳥調査報告2007-2008年. 知床博物館研究報告 30:89-94.
- [9]環境省. 2011. 平成 22 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）海鳥調査報告書. 環境省, 東京.
- [10]環境省. 2014. 平成 25 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書. 環境省, 東京.

・網走沖の海鳥

ウトウとマダラウミスズメについて

川崎康弘（日本野鳥の会オホーツク支部）

■はじめに

オホーツク海はミンククジラ（図 1）やナガスクジラなどの鯨類が多く、古くから捕鯨が盛んに行われてきた。中でも網走市はその中心地であり、商業捕鯨が禁止になった現在でも、調査捕鯨として毎年一定数の捕鯨活動が継続されており、スーパーの店頭に新鮮なクジラの肉が並ぶことも珍しくない。しかし、そんな捕鯨のマチでも今やクジラは「食べるもの」から「観るもの」になりつつある。



図 1. ミンククジラ（2016 年 5 月 21 日撮影）

2010 年 9 月から始まった「あばしりネイチャークルーズ（以下クルーズ）」（図 2）は、40 年以上も捕鯨船に乗ってクジラを追いつけてきた船長が、「捕る」側から「観せる」側へと舵を 180° 転換したとてもユニークな試みであり、長距離の追跡や一瞬の動きを読んだ先の回りなど、まさにクジラを知り尽くしたプロのスキルが最大限に活かされたホエールウォッチング船として人気を博している。

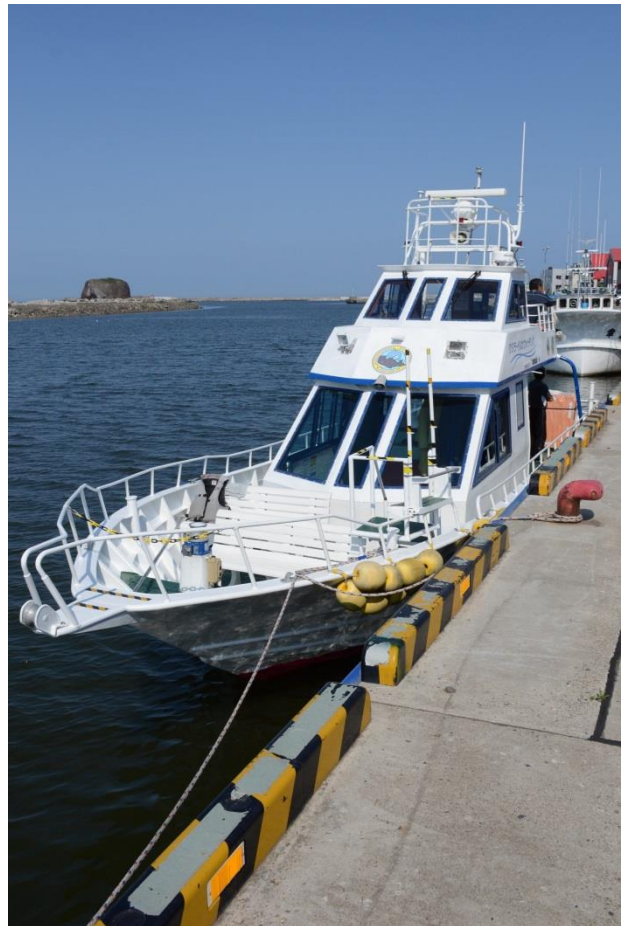


図 2. あばしりネイチャークルーズ船「チバシリ号」（2015 年 8 月 3 日撮影）

鯨類が多い海域には大食漢の彼らを満足させるだけの小魚やアミ類などの餌資源が豊富にあり、海鳥類も多く見られる（図 3）。クルーズはあくまで一般観光客向けの企画であるため鯨類の観察・追跡が優先されること、また航路が決まっていないこともあって定量的な調査には向かないが、「網走沖ではどの時期にどんな海鳥が見られるか」という単純な問いの答えを求める手段としては十分に期待ができる。

前置きが長くなってしまったが、筆者は縁あって 2013 年よりたびたびこのクルーズに乗船させていただくようになり、網走沖の海鳥の観察を続けてきた。これまでわからなかった事実が少しずつ明らかとなってきた一方で、知れば知るほどわからなくなることがあるのも事実である。今回は

その中から2点を話題としてご提供したいと思う。筆者の不勉強もあると思うので、もしそれぞれについて何かしらの情報をご存じの方がおられたら、是非ご教示いただければと思う。



図3. ミンククジラとその周囲に集まるウトウ (2016年6月29日撮影)

■網走沖のウトウはどこへ餌を運ぶ？

ウトウは網走沖ではもっとも数の多いウミスズメ類である。クルーズは4月から11月まで就航しているが、期間を通してウトウは普通に観察できる。5-6月頃にはつがいと思われる2羽で海上に浮かび、ディスプレイを行うところが観察でき(図4)、6月下旬頃からは、しばしば細長い魚を何尾も嘴にくわえている様子(図5)が見られる。夕方に北西の方角へと飛んで行く個体(図6)も何度か見かけた。いずれも観察地は網走港の北～北東およそ10～25km程度の海域である。彼らはいったいどこまで餌を運んでいるのだろうか？

ウトウの国内最大の繁殖地は天売島であるが、天売島で繁殖するウトウが日帰りで往復できる最大採食範囲は約150kmとされ、天売島を中心とした円で示すと、オホーツク海側南部ではおよそ紋別～湧別沖くらいまでがその範疇となる(綿貫2010)。ただし、これはあくまで直線距離の範囲なので、地形の概念は含まれていない。ウト

ウが網走沖から天売島まで餌を運ぶと仮定した場合、オホーツク海から日本海へと道北地方の山塊を西に飛び越えていくことは考えにくく、ひたすら海上を北上し、宗谷海峡をぐるりと回って南下するしかない。このルートの場合、ざっと測って400kmもある。千嶋(2014)によれば、宗谷海峡を早朝から午前早くに日本海からオホーツク海、午後から夕方に逆方向へ飛ぶ群れが多数観察されるとされ、筆者もそのような群れを観察したことがあるが、彼らの中に400kmもの距離を行き来している個体がいるのだろうか。



図4. ディスプレイをしていた、つがいと思われるウトウ(2016年5月14日撮影)

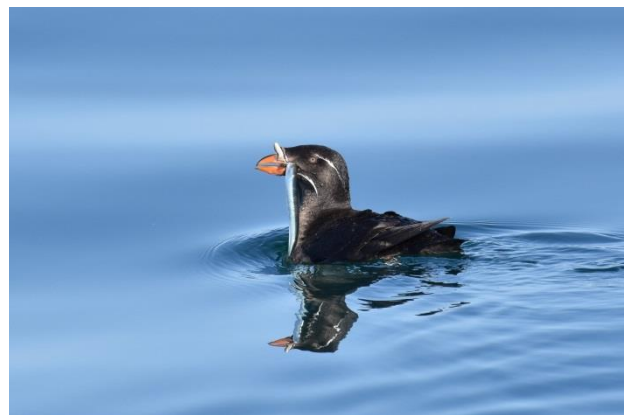


図5. イカナゴをくわえていたウトウ (2016年6月29日撮影)

網走近郊の海鳥類の繁殖地としては知床半島が有名だが、ウトウは繁殖していない。もっとも近いウトウの繁殖地としては国後島(北西端までの直線距離は約150km)

かその周辺ということになり、天売島の個体群の最大採食範囲から考えても妥当なところかと思うのだが、これまで筆者が観察した限りでは、餌をくわえて飛んで行く個体は皆、国後島とは逆の北西（つまり宗谷岬）方向へと向かっていた。

あらためて問いたい。彼らはいったいどこまで餌を運んでいるのだろうか？



図 6. 夕方、魚をくわえて飛んでいたウトウ（2016 年 6 月 25 日 17:29 撮影）

■マダラウミスズメの現状は？

筆者が生まれ育ち、現在も居住している小清水町は、日本で唯一マダラウミスズメの繁殖が確認された町である。といっても、この繁殖記録にはいろいろと疑問もある。そのあたりは千嶋（2013）がわかりやすくまとめているので、気になる方はそちらをあたっていただきたい。

この「（今のところ）日本唯一」とされている繁殖記録の真偽はともかくとして、小清水町から網走市の海上ではかつて、マダラウミスズメが繁殖時期によく見られたことは事実である。筆者が頻繁に観察を行っていた 1990 年代から 2000 年代初め頃にかけては小清水町止別の海岸を中心にしばしば観察され、2004 年 6 月 20 日には濤沸湖の湖口の沖で 5 羽の少群も観察された（この 5 羽の群れは 6 月 24 日にも野鳥の会会員によって確認されている）。これら

の記録はいずれも岸からフィールドスコープによるもので、ほとんどが岸から 100～1000m 内外、時には 10～15m という波打ち際で見られたこともあった（川崎 1997）。1982 年 8 月 25 日には山階鳥類研究所の柿澤亮三氏らが浜小清水沖の海上で 5 羽を捕獲しているが、いずれも岸から 500～1,000m の範囲であった（関根 1987）。

クルーズでは鯨類を求めて網走港を出ると一気に沖へ向かうため（図 7）、岸寄りに多い本種の観察はあまり期待できない。これまでに筆者がクルーズで確認できたのは、2016 年 5 月 14 日に 1 羽（図 8）と同 21 日に 2 羽の 2 回だけで、いずれも岸から数キロの、網走港に比較的近い海域であった。

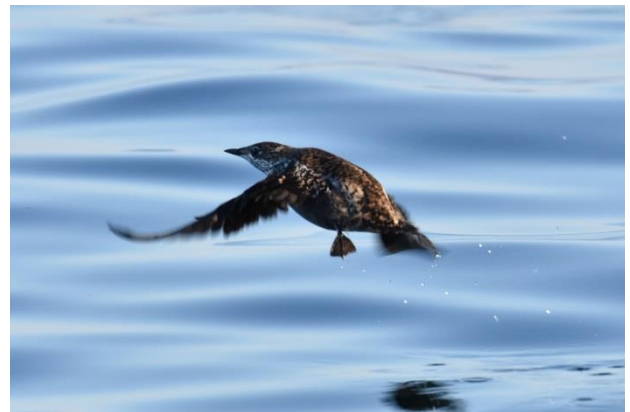


図 8. マダラウミスズメ夏羽（2016 年 5 月 14 日撮影）

筆者は 2000 年代の後半から海岸で鳥を見る機会が減ってしまったため、近年の観察事例は上記のクルーズでの 2 例しかなく、網走市から小清水町の沿岸域における状況は不明であるが、千嶋（2013）は道内の繁殖個体群は消滅したかその手前の可能性が高いと指摘しており、状況確認を急がなければいけない。海岸からの地道な観察も有効ではあるが、シーカヤックを用いた調査なども今後検討していきたいと考えている。

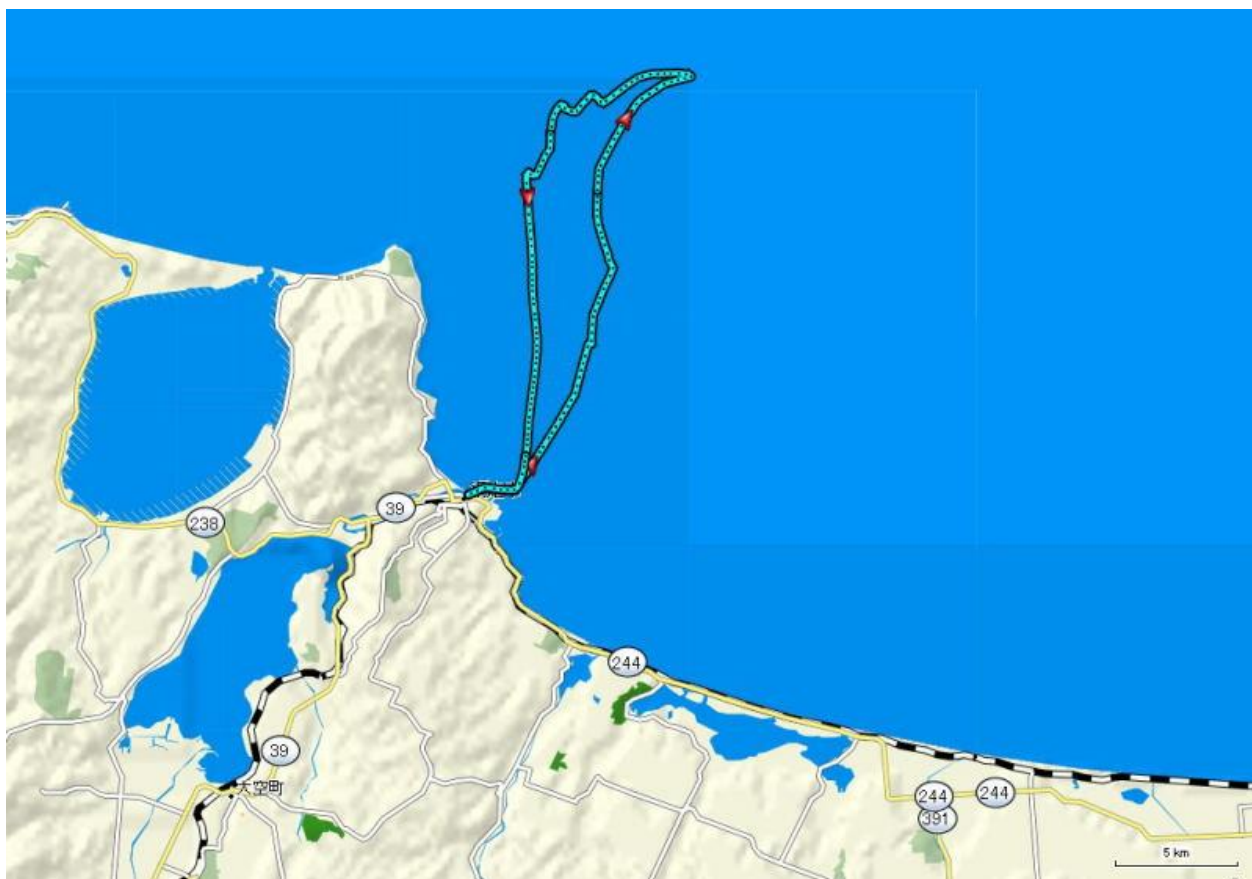


図 7. 2013 年 9 月 7 日のクルーズの航跡

<引用文献>

- 千嶋淳. 2013. 北海道の海鳥 1 ウミスズメ類①. NPO 法人日本野鳥の会十勝支部, 帯広.
- 千嶋淳. 2014. 北海道の海鳥 2 ウミスズメ類②. NPO 法人日本野鳥の会十勝支部, 帯広.
- 川崎康弘. 1997. 網走市・小清水町・斜里町におけるオホーツク海沿岸部周辺の

- 鳥類. 知床博物館研報 18:19-34.
- 関根正行. 1987. 北海道小清水町に於けるマダラウミスズメの生態と繁殖について. 小清水の野鳥 135-140. 小清水町教育委員会, 小清水.
- 綿貫豊. 2010. 海鳥の行動と生態—その海洋生活への適応. 生物研究社, 東京.

・日本海北部における繁殖期のウトウの動き 長谷部真（当会代表）

◆はじめに

天売島で繁殖する数十万羽のウトウの生態は天売海鳥研究室により長年研究が続けられ、繁殖期には餌を求めて積丹半島から日本海北部にかけて移動していることが明らかになっています。

筆者が2011年6月に増毛町雄冬で海鳥繁殖地の調査を行った際にも海岸沿いに集まって採餌するウトウの群れを確認しました（図1・図2、長谷部ほか 2012、海鳥日記・雄冬の海鳥調査）。枝幸町音標漁港でも2016年6月に海岸沿いを北上するウトウの集団が確認されています（村山2016）。利礼航路では5月中旬から8月上旬まで多くのウトウが確認されており、特に多いのが7月です（杉村2004）。小平町の日本海沿岸でも、6月にウトウの群れが通過するのを何度も見たことがあります。こうして季節になると人知れずウトウの大移動が毎日繰り広げられている訳ですが、特に注目されておらず、一日の中でどのように移動しているのかはあまり調べられていませんでした。



図1 雄冬沿岸に集まるウトウ
(2011/6/6)

今回は利礼航路のウトウの出現状況と、（公財）日本野鳥の会が道北地方で2016年に行った一般鳥類調査結果と2017年

に行った海鳥調査結果から、日本海北部における繁殖期のウトウの動きについて検証してみます。



図2 ウミネコと共に鳥山を形成
(2011/6/6)

◆利礼航路上と日本海側沿岸のウトウの動き

天売島以外で初めてウトウの日周行動を目の当たりにしたのは2014年7月にトド島で海鳥調査を終えて礼文島から稚内に帰ってきた時です。19時前にノシャップ岬周辺にさしかかると、日本海方面に向かうウトウの群れに遭遇しました（図3 海鳥日記・礼文島海鳥調査③）。ウトウの群れは途切れることなく、稚内港に入る直前までひたすら続きました（図4・図5）。天売航路でもこのようなはっきりした動きは見られていません。稚内から早朝便に乗ると今度はノシャップ岬方面からウトウが東に向かって移動していきます。



図3 ノシャップ岬の東側の日本海方面へ向かうウトウ(2016/7/10 夕方)



図4 稚内港の外をノシャップ岬方面へ向かうウトウ(2016/6/6)

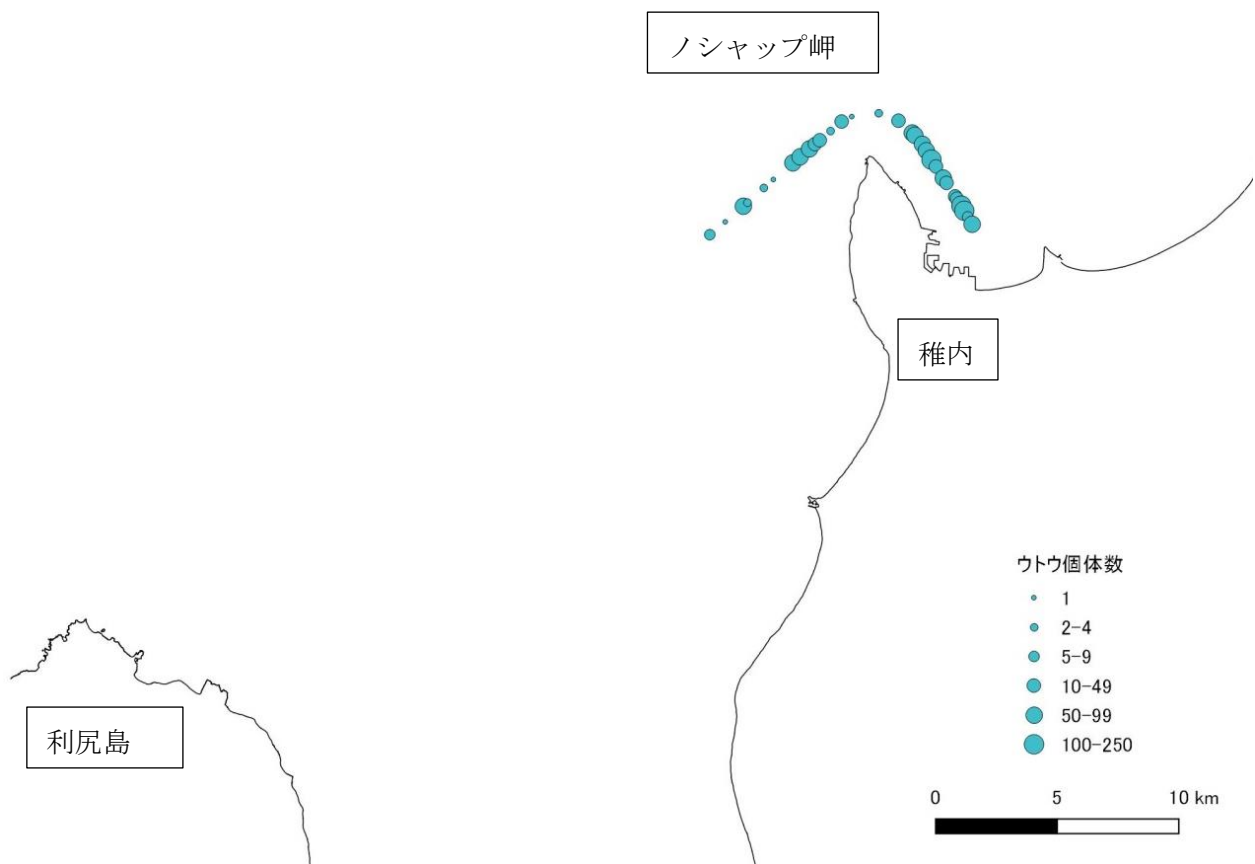


図5 利尻稚内航路に上におけるタ方のウトウの確認位置と個体数(2014/7/6)

北の海鳥 6号

2016 年の主に 6 月の早朝（4-8 時）に（公財）日本野鳥の会の風車に関する野鳥の脆弱性地図作りの一貫で、道北地方の 80 箇所程度で一般鳥類調査が行われました（図 6）。この調査で豊富町から稚内にかけての西側に突き出た日本海側 9 箇所と宗谷岬周辺の 2 箇所の調査地点でウトウが海上を北上するのが確認されました（図 7 当会ブログ 1・ウトウ群れの移動）。日本海を北上する個体群は位置的に天売島から来たと考えてよいでしょう。

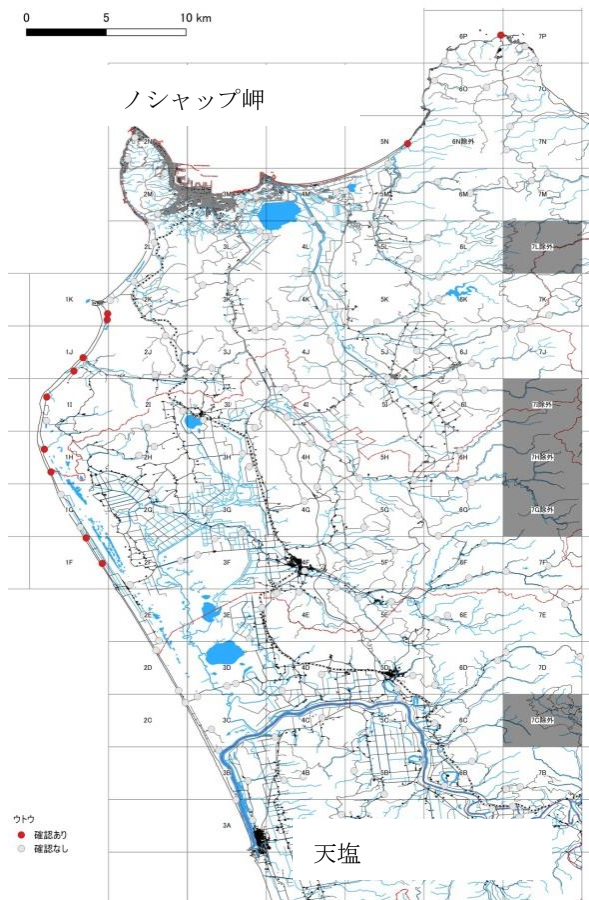


図 6 メッシュごとにおける一般鳥類調査結果（ウトウ 赤丸：確認あり 白丸：確認なし 日本野鳥の会未発表資料）

◆稚咲内沖ウトウ調査

2017 年には同じく日本野鳥の会の調査で、稚咲内沖で 12 本の 10km の線を 2 日にわけて漁船で東西に 15km/h の速さでジクザグに進み、左右 300m 以内に出現

する海鳥の種と個体数を数えました（図 8）。1 つの線を調査するのに約 40 分かかりました。通常は 8 時に稚咲内沖を出港し、約 7 時間半かかり 15 時半頃に帰航していましたが、6 月はウトウが調査対象だったので、調査を朝と夕に行いました。

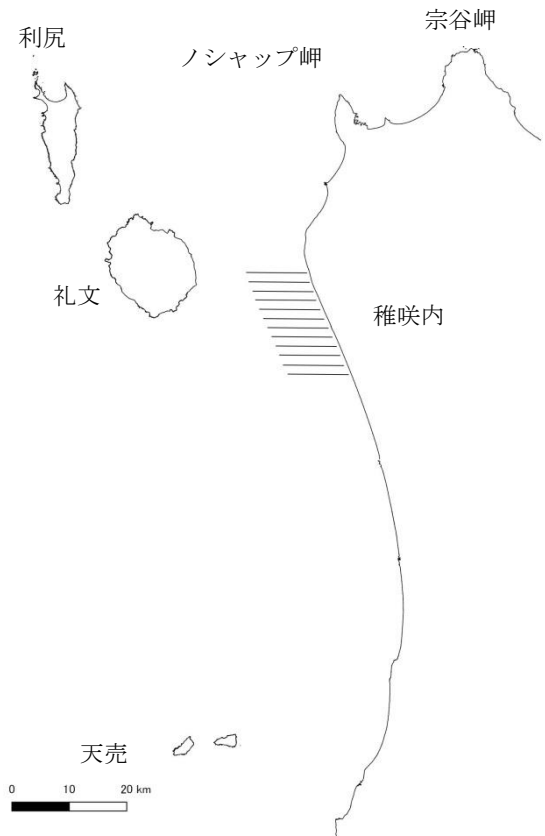


図 8 稚咲内沖海鳥調査線 日本野鳥の会未発表資料

6 月 16 日は早朝のウトウの動きを見るための、いつもより早めに 7 時出港し、北側の線から順に調査を行いました。ウトウが確認されたのは主に沿岸で、南から北に向かっていました（図 9、図 10 当会ブログ 稚咲内の海鳥 5）。1 箇所でウミネコと共に鳥山を形成し、餌を獲っていました（図 11）。11 時半過ぎに行った下から 2 番目の調査線以降でウトウはほとんど見られなくなりました。

6 月 22 日はちょうど夕暮れ時に調査が

北の海鳥 6号

終わるように13時出港としました。南から2本までの線ではウトウの姿はほとんどみられませんでした。15時半を過ぎた3本目からは沖合を北から南へ向かうウトウの群れが出現し始め、その範囲は時間が遅い線ほど広範囲になりました(図13 当会ブログ 稚咲内の海鳥6)。始めのうちは

移動個体のみでしたが、17時台に行った調査線から餌持ち個体が増え始め、一番北の18時台の調査では餌持ち率が多くなり、餌持ち率が7-8割の集団もありました(図14)。餌の多くはホッケでしたが(図15)、イカナゴを持っているのも確認しました。



図7 早朝夕来沖をノシャップ岬方面へ北上するウトウ(2016/6/7)



図9 朝の稚咲内沿岸を北上するウトウ
2017/6/16



図11 朝の稚咲内沿岸でウミネコと共に
鳥山を形成するウトウ 2017/6/16

北の海鳥 6号

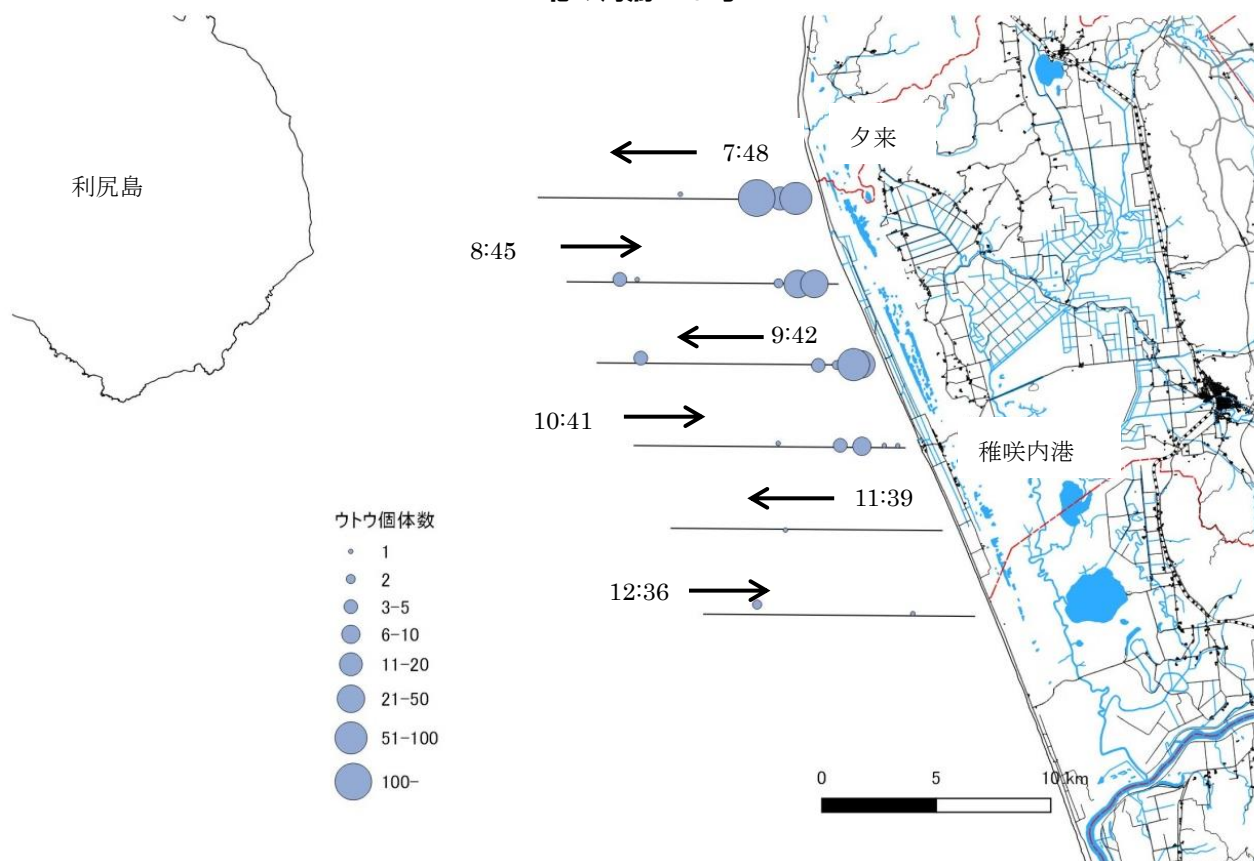


図 10 稚咲内沖のウトウの位置と個体数（2017/6/16 7:48-13:21）北から南へ矢印の向きに線上を移動。時刻はおおよそそれぞれの線における調査開始時間 日本野鳥の会未発表資料。

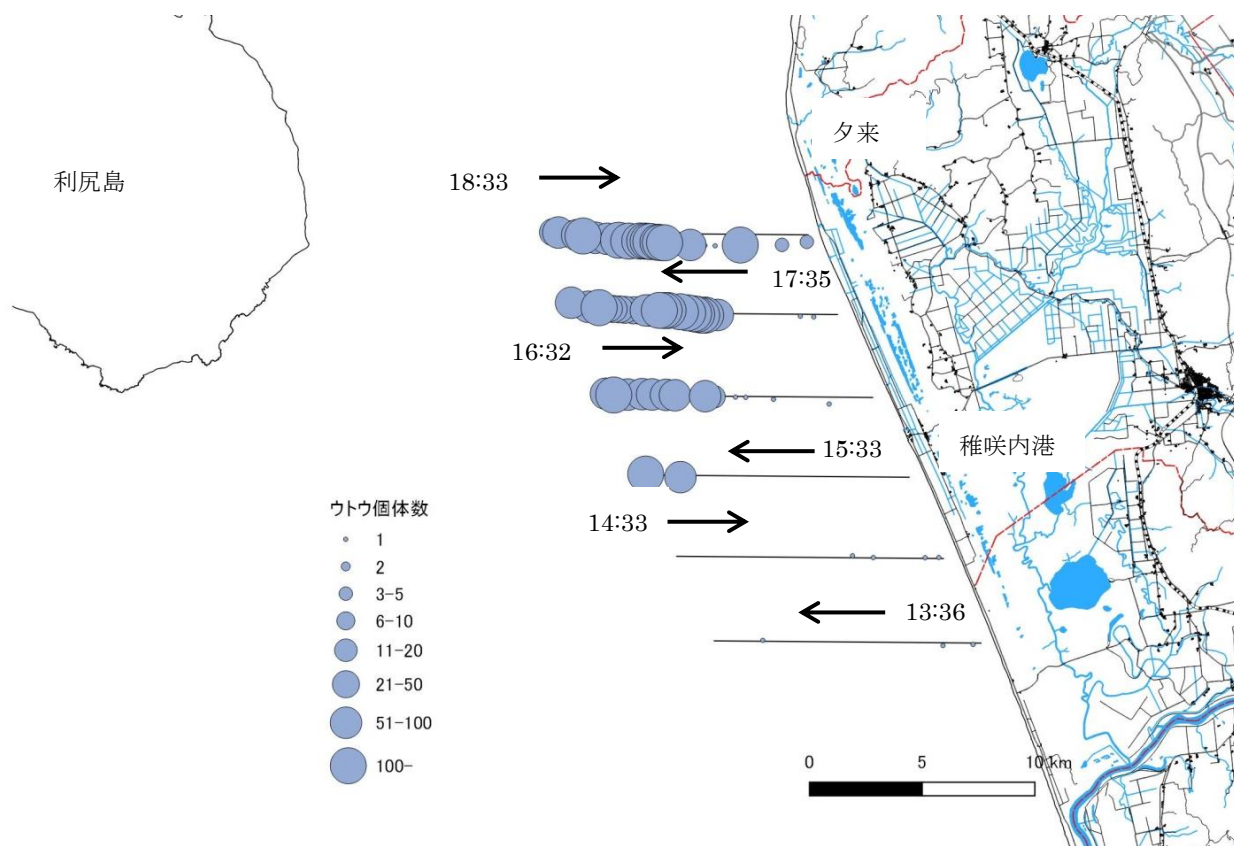


図 12 稚咲内沖のウトウの位置と個体数（2017/6/22 13:36-19:15）南から北へ矢印の向きに線上を移動。時刻はおおよそそれぞれの線における調査開始時間 日本野鳥の会未発表資料。



図 13 夕方、夕来沖を集団で南下するウトウ



図 14 夕方、夕来沖を集団で南下するウトウ ほとんどが餌持ちでウミガラスが1羽混じっている



図 15 ホッケを運ぶウトウ

これまでウトウの餌持ちは天売島やトド島の繁殖地周辺か、航路上でちらほら見る程度でしたが、こうして、ウトウの大集団が餌を持って繁殖地である天売島に向かうところを初めて目の当たりにしました。この日も船が振れ、前半は海鳥がほとんど出ないきつい調査でしたが、夕暮れ時のウトウの大集団はその疲れが吹き飛ぶほどの素晴らしい光景でした。

断片的な記録しかありませんが、以上の観察記録から考えると、ウトウの少なくとも

北の海鳥 6号

も一集団は 6-7 月に早朝に天売島を出発し、沿岸域で餌を探しながら北上し、オホーツク海に抜け、夕暮れ時に沖合を直線的に天売島に帰巢することが推定されます（図 16）。稚内や豊富な沿岸で夕暮れ時にウトウの群れを見たことがなかったのも、沖を通っていたからかもしれません。

これらの調査結果から、繁殖期になると、ウトウは日々、人知れず大移動を繰り返していることを垣間見ることができました。ウトウの移動を明らかにするためには、海ワシで行っているような一斉調査をやってみたらおもしろいかもしれません。

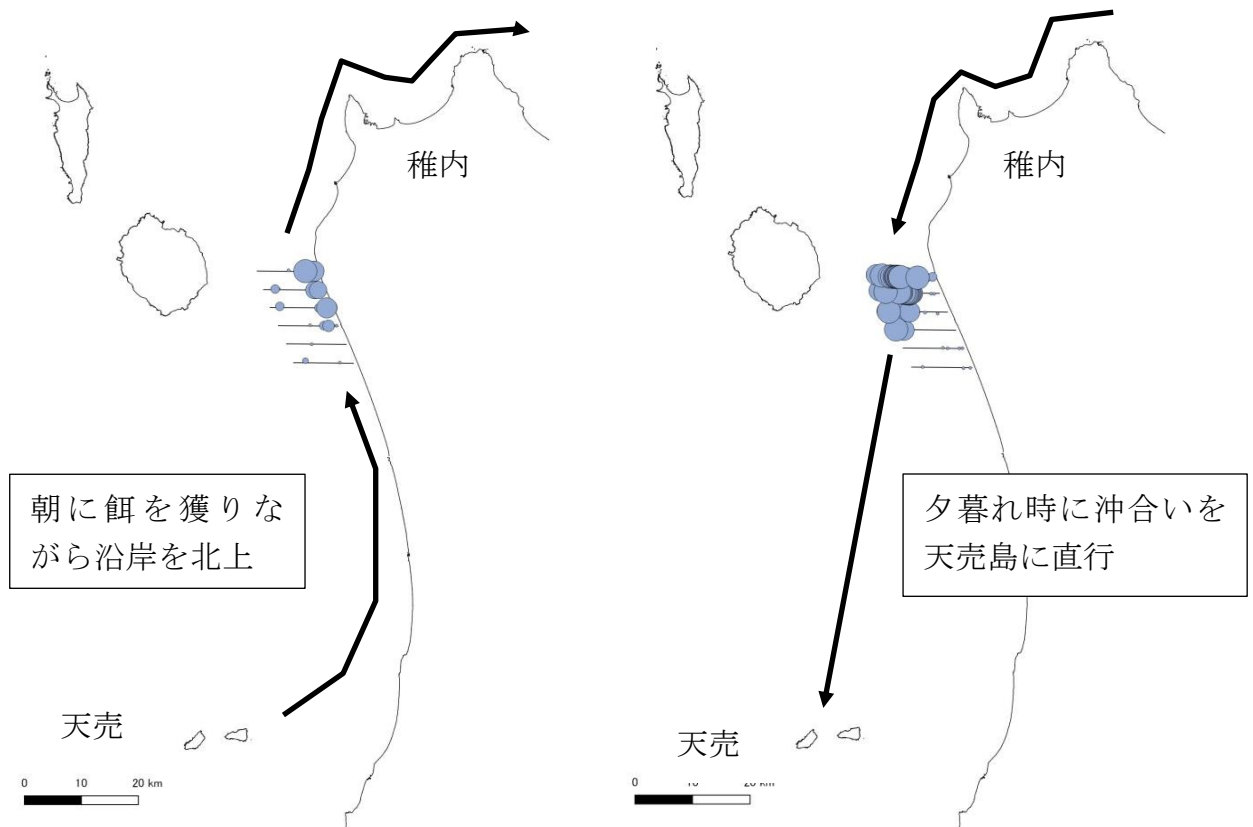


図 16 海鳥調査結果から推定するウトウの朝夕の動き

◆引用文献

海鳥日記 雄冬の家鳥調査

<http://seabirds.exblog.jp/16157330/>

海鳥日記 礼文島海鳥調査③

<http://seabirds.exblog.jp/22699935/>

杉村直樹. 2004. 利礼航路で観察された鳥類および海棲哺乳類. 利尻研究 23: 93-128.

長谷部真・岩澤光子・石郷岡卓哉・善波めぐみ, 2012. 雄冬地区における海上調査による海鳥の繁殖記録. 利尻研究 31: 69-72.

北海道海鳥保全研究会ブログ ウトウ群れの移動

<http://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconserveg/single-post/2016/07/02/%E3%82%A6%E3%83%88%E3%82%A6%E7%BE%A4%E3%82%8C%E3%81%AE%E7%A7%BB%E5%8B%95>

<http://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconserveg/single-post/2017/06/18/%E7%A8%9A%E5%92%B2%E5%86%85%E3%81%AE%E6%B5%B7%E9%B3%A55>

北海道海鳥保全研究会ブログ 稚咲内沖の家鳥5

<http://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconserveg/single-post/2017/07/07/%E7%A8%9A%E5%92%B2%E5%86%85%E3%81%AE%E6%B5%B7%E9%B3%A56>

北海道海鳥保全研究会ブログ 稚咲内沖の家鳥6

<http://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconserveg/single-post/2017/07/07/%E7%A8%9A%E5%92%B2%E5%86%85%E3%81%AE%E6%B5%B7%E9%B3%A56>

村山良子. 2016. 枝幸町音標ゴメ島海鳥繁殖調査報告. 北の家鳥 3: 18-24.

・1950-60 年代の大黒島・モユルリ島の海鳥
村田英二

◆大黒島

大黒島には私が天売島で中学校の教諭をしていた頃 1954-55 年頃の 8 月に夏休みを利用して行きました。当初は当時北海道大学で講師をしていた太田嘉四夫氏のネ

ズミ調査を手伝いに行く形で 2 回行きましたが、とても気に入ったので、自分だけでも行きました。

厚岸には北大理学部の臨海試験場があり、そこに研究者用の寮があったので、そこに寝泊まりさせてもらい、臨海試験場の実習船の船に乗せてもらい大黒島の北側に渡りました(図 1)。



図 1 大黒島とユルリ・モユルリ島の位置

大黒島に来た目的はウミスズメ科の海鳥を見ることでした。この当時からコシジロウミツバメはたくさんいました(図 2、図 3)。島へは日帰りで行きましたが、昼間に島に残っている成鳥がいて、巣穴の入り口付近に雛がいました。現在はもういないようですが、当時は大黒島にエトピリカがいました(図 4)。島の北東部の上部急斜面に

7-8 羽いました。繁殖していたと思いますが、その周辺で巣を見つけていないので、はっきりとはわかりません。ケイマフリやウミガラスはみかけていません。オオセグロカモメは少しだけ繁殖していました(図 5)。



図2 コシジロウミツバメ成鳥



図3 コシジロウミツバメ雛

◆モユルリ島

1960年5月に第12回国際鳥類保護会議が東京で開催されました(山階1960)。この会議にはアメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ブラジル、インド、マレーシア、韓国など各国から参加があり、日本からは山階芳麿氏、黒田長久氏、犬飼哲夫氏などが代表として参加しました。会議が終わった6月に、現地視察があり、その中に北海道が含まれていました。犬飼哲夫北大農学部教授が率いる20-30人の調査団が北海道各地の鳥類を見ながら、モユルリ島に行



図4 大黒島のそばにいたエトピリカ



図5 オオセグロカモメ

くことになりました(図1)。その案内人として、当時犬飼哲夫氏の学生でモユルリ島で調査を行っていた藤巻裕蔵氏と、歌志内の教員で学生の頃から犬飼哲夫氏と面識のあった私が加わりました。花咲港からモユルリ島に向けて出港した船に乗った調査団は日帰りで帰りましたが(図6)、私と藤巻さんだけは急遽モユルリ島に宿泊することになりました。モユルリ島の調査は2泊の予定でしたが、2日目の夜にテントを飛ばされるほどの嵐になりました。船が迎えに来られなくなったため、ユルリ島にあった

番屋から船が迎えに来て、ユルリ島にもう 一泊しました。



図6 花咲港と遠くに見えるユルリ・モユルリ島

モユルリ島に来た一番の目的はチシマウガラスを見ることでした。巣もありましたが、10 巣以下でした（図 7、図 8、図 9）。斜面にエトピリカの巣がいくつかありました（図 10、図 11、図 12）。ウトウの巣もありましたが、あまり多くありませんでした。ウミガラスもいましたが、繁殖の確認はできませんでした。オオセグロカモメもいましたが、数は多くありませんでした。

残念なことに、ユルリ島では鳥を見に行く余裕はありませんでした。ただ、何岩だったか忘れましたが、ウミガラスが貼り付いていて、繁殖しているのを確認しました。チシマウガラスは見あたりませんでした。

モユルリ島の調査結果は藤巻(1961)に詳しく書かれています。



図 7 海から巣に向かうチシマウガラス



図8 巣に向かうチシマウガラス



図9 チシマウガラス

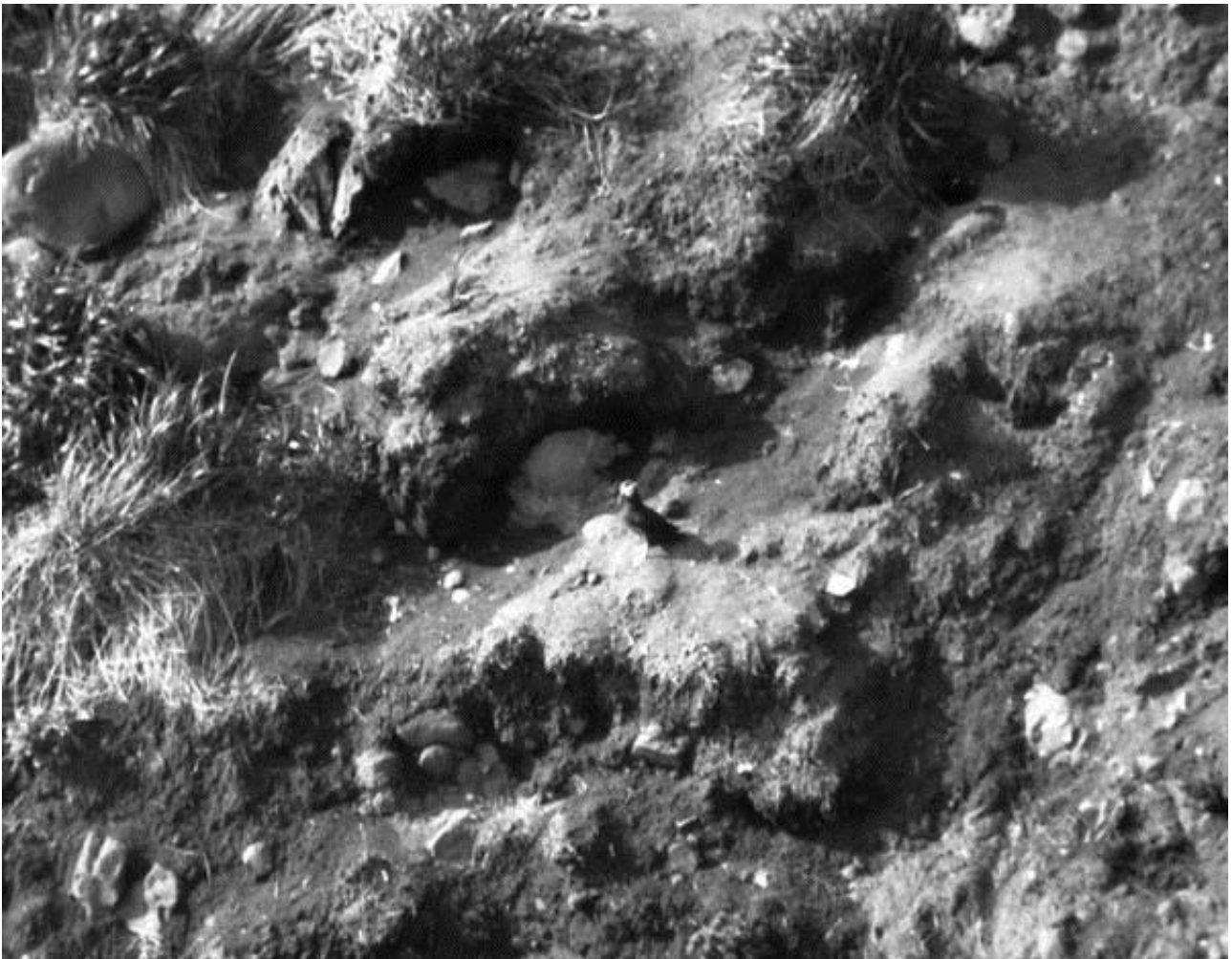


図10 エトピリカの営巣環境



図 11 巣穴の前のエトピリカ



図 12 エトピリカ

◆参考文献

藤巻裕蔵 1961.モユルリ島の海鳥類. 鳥
16: 387-399.

山階芳麿 1960. 第 12 回国際鳥類保
護会議(I.C.B.P.)東京に開かれる. 山階
鳥研報 22: 67-70.

3. おしらせ

・トド島ウトウ調査

2018 年は 2017 年にトド島のウトウ
に装着したジオロケータを回収しに行き
ます。次号に結果を報告する予定なので、ご
期待ください。

・会報誌『北の海鳥』

今回は偶然ウトウに関する話題が3つあ
り、ウトウ特集のようになりました。初め
て記事を書いてくれた人には感謝します。
この会報誌により、これまで埋もれていた
情報が、明らかになっていけばと思います。
会報誌は年 2 回の発行ですので、次号は
2018 年の9月頃に発行する予定です。内
容は新しいものでも古いものでも構いませ

ん。今後も記事の寄稿をよろしくお願いし
ます。ご連絡は 長谷部までお願いします。

hasebemakoto@hotmail.com

・北海道海鳥保全研究会ホームページ

ホームページはあまり更新していません
が、時々ブログ記事を新しく更新していま
すので、ぜひご覧ください。

[http://hseabirdconservati.wixsite.co
m/hseabirdconservg/blog](http://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconservg/blog)

もし、海鳥に関するブログ記事を書きた
い方がいましたら、原稿を上記メールアド
レスまで送ってください。